報告

［2023年度入試説明会講演］

アーカイブズ学の扉をたたいて
―実践を支える出会いと理論―

Let’s Study Archival Science：From a Student

大西　智子
Tomoko Onishi

1　はじめに：アーカイブズ学専攻との出会い

「人間は一生のうちに逢うべき人には必ず逢える。しかも、一瞬早すぎず、一瞬遅すぎない時に」。これは、哲学者であり教育者でもあった森信三の言葉です。私はこの言葉が好きで、大切にしています。私と学習院大学大学院アーカイブズ学専攻の出会いは、まさにこの言葉に相応しいものだったと言えます。

私は現在、日本赤十字社広報室赤十字情報プラザの参事を務めながら、当アーカイブズ学専攻の博士後期課程３年に在籍しています。

赤十字は、1859年イタリア統一戦争の悲劇を目の当たりにしたスイス人のアンリー・デュナンの思想からはじまり、現在では191の国と地域に広がっています。日本赤十字社（以下、日赤）は、1877年の西南戦争の最中に「敵味方の区別なく救護する」ことを目的として設立され、国際的な赤十字のネットワークの一員となり、現在は災害救護など苦しむ人を救うための認可法人として活動しています。設立当初は戦争救護を主な業務としましたが、その主たる業務を遂行するための手段として、また、人々の要望やニーズに応える形で、看護師養成や病院経営、結核など

この報告は、2023年10月21日（土）に開催された入試説明会に伴う講演会「在学生・修了生の声をきく」の内容に部分的に加筆修正をしたものである。

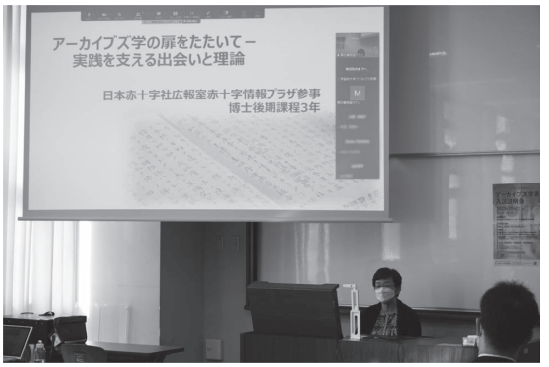
赤十字情報プラザの入口（東京都港区）

の感染症対策や予防活動、自然災害救護、国際救援、救急法などの講習、青少年赤十字活動、福祉施設の運営などを行うようになり、第二次世界大戦後は戦争を放棄した国の赤十字社として、国の戦後処理を補佐する業務や、献血事業が加わり現在に至ります。

私が所属する赤十字情報プラザは、日赤本社の広報室に属し、赤十字事業の普及を目的として資料の収集、保存、展示などを行っており、全国の赤十字ボランティアや修学旅行生などが訪れる場所です。所蔵資料には、赤十字誕生のきっかけとなったアンリー・デュナン著『ソルフェリーノの思い出』の初版をはじめ、フローレンス・ナイチンゲール著『看護覚え書』、西南戦争以降の日赤の救護活動に関する記録や、その後の戦争や災害での救護報告書、機関誌、写真などがあります。私は現在、赤十字情報プラザが所蔵する資料の管理・保存・公開業務を統括的な立場で担当し、これらの効果的な活用方法を模索する日々を送っています。

日赤での勤務は、今年で30年となりました。実は長年にわたり、職場で膨大な量の資料が廃棄される様子を見るたびに違和感を覚える自分がいました。何を保存し、何を捨てるのか、その作業はルールに沿って行われますが、今振り返ると、私が感じていた違和感とは、そのルールと現状のギャップに対するものだったと思います。その違和感について、当時の私は頭で整理できておらず、言葉にして説明が出来ませんでしたので、なんとなく「捨てたらダメなんじゃない？」「これは保存しておいた方が良いのでは？」と口にはしますが、全く説得力がありませんでした。

そうしたなかでアーカイブズ学という学問を知り、学習院大学大学院アーカイブズ学専攻に入学すれば、このような疑問に対する解決の糸口が得られるのではないかと考えました。また、専門的な知識を身につけることに期待もしました。いつかアーカイブズ学を学びたいと思いましたが、平日は朝9時から勤務、残業も多く、土日も関係なく仕事が入り、



自由が利かない業務を担当していたこともあり、なかなか機会がありませんでした。

ある時、仕事上の転機を迎え、ふと大学院で勉強したいことを周囲に漏らしました。私が大学院に行くということは、職場を抜ける時間帯の業務をほかの人がやらなければなりませんので、どのような反応が返ってくるか不安でした。しかし、同僚や上司からは、思いがけず応援の言葉をもらいました。ちょうど諸々のタイミングが合ったことや、その時のよき上司や後輩との縁があってのことです。また、それまでの頑張りを見てもらえていたように思えて、とても嬉しかったことを思い出します。幸せなことです。

2018年の年初、学習院大学大学院アーカイブズ学専攻に一本の電話をしました。「入学試験の申し込み、まだ間に合いますか？」と問い合わせたところ、「出願締切は明後日です」という回答でした。「今だ！」と、確信した瞬間でした。

私は2018年の春にアーカイブズ学専攻の博士前期課程に入学しました。入学後に得られたことは、私が抱いていた期待に十分に応えてくれるものでした。素晴らしい指導者、志を同じくする仲間たち（学生に限らず）、そしてアーカイブズ学専攻が所蔵する数多くの国内外の文献や学術誌に接する機会を得ることができたのです。入学後、はじめてアーカイブズ学専攻の院生室に足を踏み入れた時、壁一面に並ぶ多くの文献の背表紙を見て、胸がときめきました。それは今も変わりません。

2　扉が開く

いよいよ、アーカイブズの扉が開くことになります。日赤勤務27年目にして、2019年に赤十字情報プラザ兼務となり、資料展示室の担当になったのです。当時、赤十字情報プラザのスタッフは職員OBの２人と、10年先輩の専任職員１人、そしてほかの業務を主とする兼務職員が数名という状況でしたが、そこに私が加わることになりました。アーカイブズ学専攻への進学が私のパスポートになったのです。

翌2020年、私はアーカイブズ学専攻の博士前期課程を終えて、博士後期課程に進学しました。博士後期課程に進むことを周囲に伝えた時の反応は、「大西さん、本気だったんだね」というものでした。そして私は、赤十字情報プラザ専属の参事として配属されました。

ようやく勤務先での経験とアーカイブズ学専攻での学びを生かして働くことができる、と張り切った矢先、世界的に新型コロナウイルス感染症が拡大しました。赤十字情報プラザは、小さな資料展示室とはいえ、従来ならば年間約5,000人の見学者が訪れる施設でした。しかし、緊急事態宣言の発出に伴い、不要不急の外出が制限されると、来館者は０人にな

りました。とても残念なことでした。

しかし、「来館者がいないからこそ出来ること」をやるべきと気持ちを入れ替え、まず取り掛かったのは大掃除と資料の整理です。毎日雑巾を片手に掃除していました。しかし、これらの作業を開始するやいなや、思わぬ壁に当たりました。資料などから舞い上がるホコリとカビやサビが原因となり、結膜炎、皮膚の炎症、喉の痛みや咳、コロナではない気管支炎や発熱といった症状が出たのです。既にプラザで仕事をしていたスタッフの中には、喉の炎症や痰の絡みに長期にわたって悩んでいる人もいました。

こうした問題に接し、専攻で資料保存論を担当する青木睦先生に学んだ「文化財IPM（Integrated Pest Management：総合的有害生物管理）」という資料の長期保存処置の考え方を思い出しました。これは、資料を扱う人の健康のためにも実践されるべき取り組みです。IPMの項目にある「害虫調査」と「燻蒸（くんじょう）」の実行を目指し、働きかけた結果、社内の理解と予算を得られたので、早速、10tトラックいっぱいの資料を燻蒸しました。また、燻蒸済みの資料が返却されてきた時に、再びホコリやカビが付着しないよう、保管書庫の壁や書棚を消毒用エタノールにより清拭し、その後も毎日雑巾を手に掃除をしていました。そのような私の姿に理解を示してくれた同僚のおかげで、資料保存スペースに設置されていた冷蔵庫や湯沸かし器、観葉植物を撤去し、長期保存に適した環境整備の第一歩を進めることができました。

さらに上司からは、新型コロナウイルスによる様々な規制が緩和されれば、再び来館者が戻ってくる、と激励され、来館者間のディスタンスを確保するべく、展示品を大量に（100点以上）間引きし、重要な展示品だけを残して、一筆書きの動線で鑑賞できるようにしました。また、壁の古いパネルや年表も更新し、その上で、資料の目録作成を開始しました。

赤十字情報プラザが2003年に設立される前は、たった一人の図書館司書の資格を有するスタッフが職員用の図書室で社内の一部の資料整理を行い、その情報は図書カードによって管理されました。しかし、そのスタッフが職を離れ、以来15年以上にわたり専門家が不在となりました。その間、スタッフは短期で入れ替わり、さらに保管状況も設置当初から大きく変化していたため、私が担当となった時には、図書カードの内容と実際の管理が完全に乖離した状況にありました。また、所蔵資料の全体を示す完全なリストも存在しませんでした。

そこで、所蔵品の大半が日赤作成の資料であることに鑑み、昨年からアーカイブズ学でいうところの「ISAD（G）：国際標準アーカイブズ記述」に則った目録作成を開始したところです。時間と労力はかかりますが、一度、国際標準の目録を完成すれば、私の後任が誰になっても、同じように永続的管理ができるようになると考えたためです。同じGCAS修了生の川田恭子さんが仲間として職場に加わってくれたこともとても大きな支えです。

この作業に加えて、ポストコロナを見据えた積極的なアウトリーチの一環で、誰でも、いつでも、どこからでも展示を見ることが出来るよう、ウェブサイト「赤十字WEBミュージアム」（図１）を作成し、2021年10月に公開しました。これによって、年表から日赤の沿革をたどり、来館せずとも過去の人道支援活動を知ることができ、企画展の会期が終了

図１――「赤十字WEBミュージアム」
https://www.jrc.or.jp/webmuseum/（アクセス2023.12.04）

図２――日本赤十字社企画展
「関東大震災100年「温故備震」～故きを温ね明日に備える～」

した後もウェブ上で特別企画の展示品を掲載し続けることが可能となりました。たいへん多くの方から好評を得ており、最近の半年間のサイト閲覧数は、50,000PV（ページビュー）に達しました。

今年は関東大震災から100年という節目の年です。赤十字情報プラザでは、2023年４月から企画展「関東大震災100年「温故備震」～故(ふる)きを温(たず)ね明日に備える」（図２）を開催しています。これは、100年前の記録から命と向き合った当時の人々の活動を知ると共に、「備え」について考えるきっかけにしていただけるよう、職場の仲間と検討を重ねながら準備したものです。おかげさまで開始以来、多くの反響をいただき、新型コロナウイルス感染症に係る制限の緩和も相まって、2023年中の来館者数は2,000人を超えました。そして、

10月２日には、思いがけず天皇皇后両陛下と敬宮内親王殿下をお迎えすることになりました。資料がもつ底力を実感した出来事です。

3　理論が私を支えてくれる

アーカイブズ学専攻における学びは、資料について第三者に説明し、意見を聞いてもらうための理論的支柱になると思います。資料に関わる仕事をする場合、理論に裏付けられた説得力や、現実（予算やスペース）に合わせる臨機応変さが求められます。また、実績を積み重ねることで、周囲に理解者や協力者を得やすくなります。経験上これらアーカイブズに関わる業務のすべてにおいて、理論に裏付けられたコミュニケーションと実践が問われると思います。

アーカイブズ学専攻での学びで気づいたこととは、理論を生み出す人たちは、同時にアーカイブズの実践者でもあったということです。資料を前にして悩み抜いた人たちの研究の蓄積から、アーカイブズ学の理論が生まれているのです。当然と言えば当然ですが、私にとっては大発見でした。「なんだ、皆、悩んでいるんだ」という気づきは私を孤独感と不安から解放し、実践への勇気を与えてくれました。先人から与えられた理論が私を支えてくれると理解できたのです。

4　社会人学生として

平日、フルタイムで働きながらの学業は決して楽ではありません。そのためにはまず、職場の仲間の理解が不可欠です。授業を受けるために17時に社を出るということは、自分の不在時の業務を誰かに委ねることになります。

実習期間中の休暇確保も大きな課題でした。私一人では学業は出来ません。周囲とのコミュニケーションはとても重要であり、それはアーカイブズの仕事でも同じことだと思います。理解を得る努力は不可欠です。私はタイミングや周囲に恵まれ、とても幸運です。

職場だけでなく、家族の理解も必要でした。家族は互いに助け合う存在です。私の場合、家族がそれぞれ自立して生活していたおかげで、私は学業に進むことが出来ました。

博士前期課程の２年間は睡眠不足との闘いでした。職場を出て学習院大学がある目白に着くまで、山手線の吊革につかまって寝ました。その熱意は、もっと学びたい、という気持ちに支えられたものでした。

素晴らしい指導者や仲間に囲まれる喜び、学ぶ楽しさは、人生の喜びであると実感しています。学びの環境としての学習院大学は素晴らしく、足を運ぶ楽しさは言葉に言い表せません。特に、現在50代の私にとって、こうした学びからは、専業学生として大学に通っていた20代の時とは全く別の喜びを得ることができます。実習も研修旅行も、すべてはかけがえのない幸せな時間です。今では、多くの指導者や仲間、そして何よりも職場の上司や仲間たちの理解と協力を得て、少しずつ学業を実践につなげることができつつあり、感

謝の気持ちでいっぱいです。振り返ると、思い切ってアーカイブズ学専攻に一本の電話をした、あの時の自分を、褒めてあげたいと思います。

5　今後の課題

しかし、個人の研究者としての課題は大きいと言えます。これまで述べてきた実践的な取組みのほかに、私の研究課題は、赤十字の記録が適切に管理・保存・公開されることによって何がもたらされるのか、それがアーカイブズ学としてどのような意味を持ち、社会にどのような貢献を果たしうるのかを解き明かすものです。世界の191の国と地域に広がる赤十字の記録というグローバル規模の視点を持ちつつ、それをより深く理解するために、私は現在、日赤の草創期に関する記録とその変遷をアーカイブズ学的に紐解くことに注力しています。

また、研究の成果を論文や研究ノートとして発信する必要を切に感じているところです。しかし、この点については反省の日々であり、少しずつでも研究者として自身の調査研究の成果を発表したいと考えています。

6　一緒に学びましょう

アーカイブズ学専攻の面白さは、言葉では言い尽くせませんが、そのひとつに様々な背景を持つ人たちが集まる場であるという点があると思います。

例えば、土曜のゼミでは各自が研究発表を行います。ゼミ生は、それぞれの背景や関心のもと、様々な記録について発表します。平安時代の資料、江戸時代の資料、企業の組織記録、行政の資料、映像やファッション、アートに関するもののほかに、私のように命と健康に関する記録を扱う人もいます。ありとあらゆる種類の記録・資料の話を通じて、自分が知らない世界に連れて行ってもらえる感じがします。そして、それらがすべて、アーカイブズ学という大きな柱で繋がっているのです。ゼミ生の様々な話を聞きながら、常にアーカイブズ学という視点での、自分との共通点を見出して、意見を述べ合うことができるのです。こんなに楽しいことはありません。

辞めることはいつでもできる。辞めなければならない時は必ず来る。しかし、それは、今ではない。その時が来るまでは辞めない、と私は心に決めています。現在、すでに親の介護の兆しが迫っているほか、いつ何が起きるかわかりません。ですが、それまでは、しがみついてでも、ぶら下がってでもアーカイブズ学を学び続けたいと思っています。

もし、この場に資料について関心がある方がいらっしゃるならば、ぜひ一緒に学びましょう。ご清聴、ありがとうございました。